

ただの

Frank tansakushasan,

ランク探索者さん

ukkari Srank mamono wo buttobasu.

うっかり  
ランク魔物を  
ぶっとばす

規格外ダンジョンに住んでいるので、無自覚に最強でした

2

著

むらくも航

illust.

JYOTA

たまよりげん ぶん  
**玉依玄雲**

自宅ダンジョンを有する  
玉依家の現当主。  
当主に相応しい確かな  
実力を持つ。

たまよりるいでん  
**玉依流転**

玉依玄雲の孫。  
常に寡黙で無表情のため、  
何を考えているかわからない。

**イナリ**

彦根家ダンジョンの  
地下三階で暮らす  
妖狐の親分。

**ブルーハワイ**

彦根家のアイドルを  
自称するお調子者の  
セイレーン。

**彦根家のペットたち**



めろん



わたあめ



いちご

ひなた  
**日向ヒカリ**

日本で四人しかいないSランク  
探索者の一人。高校生ながら  
Sランクに至る圧倒的な実力を持つ。

**エリカ**

ホシと共に暮らす姉的存在。  
料理の腕はプロ並みで、  
中でもハンバーグは絶品。

あまがわ  
**天の川ナナミ**

ホシの幼馴染。Bランク探索者で、  
ダンジョン配信者として  
人気を博している。

ひこね  
**彦根ホシ**

Fランク探索者の高校生。  
最低ランクながら、助っ人として  
ダンジョン配信に参加し、  
規格外の実力を見せる。

**主な登場人物**

## プロローグ 彦根家と次の目的地

「こんにちは、彦根ホシですー！」

目の前に浮かぶ配信の必需品、浮遊型カメラに向かって、俺は声をかけた。いつも通りに配信を開始すると、多くの人がコメントをしてくれる。

《こんにちは！》

《きたあああ！》

《ホシ君待ってました！》

《待ち遠しかったぞー！》

「いきなりこんなに！ いつもありがとうございますー！」

流れるコメントと共に、カメラが表示する配信のプレビュー画面には『5万人が視聴中』と表示されている。

この人数がリアルタイムで俺の配信を見ているということだ。

《ホシ君が配信始めてくれて良かった》

《今じゃホシ君なしの生活なんて考えられないもんな》

《応援せずにはいられない》

「はは、さすがに大げさですよ」

幼馴染で人気配信者の天の川ナナミから勧められて、なんとなく始めた配信活動。これが今では俺の日常になっている。

だけど、視聴者が楽しみにしてくれているのは俺だけではない。

「おーい、みんなー」

自宅の地下一階に通じる扉を開けて呼びかけると、俺のもとにすぐさま三匹のペットたちがやってきた。

現れた順に、ドラゴンのめろん、フェンリルのわたあめ、フェニックスのいちごだ。

「きゅいゅー！」

「わふー！」

「ぼおーっ！」

三匹の登場に、コメント欄は沸き上がる。

《ホシ君のペットたちだああ！》

《今日もかわいいー！！》

《ああ、もう本当に癒し》

《もふもふは世界を救う》

「おー、今日も元気いっぱいだなあ」

この小さなもふもふのペットたちは、俺の大切な家族だ。

俺はしばらく三匹を撫でてから、勢いよく立ち上がる。

「よーし、じゃあ今日の運動といくか！」

俺が呼び掛けると、三匹は一斉に力を解放した。

「きゅいゅいーギャオオオオ！」

「わふうううークオオオン！」

「ぼおおおおーゴオオオオオ！」

三匹は咆哮と同時に体を大きくさせていく。巨大化した姿は纏うオーラが全く違う。これが三匹の力を解放した状態——覚醒状態だ。

《うおおおおおー！》

《かけええええ！》

《これはSランク魔物の迫力だ……》

《あのかわいい子たちがこうなるんだもんなあ》

《何回見ても信じられねえw》

「準備はできたね！」

この姿こそが三匹の本来の姿だ。三匹が最強種のSランク魔物だと視聴者に教えてもらった時は、さすがにびっくりしたなあ。

普段は小さくて可愛い、でもいざとなれば勇ましくて強い。そんなペットたちの活躍もあり、俺の配信は人気になったんだ。

三匹にも改めて感謝しないとね。

「それじゃかってこーいっ！」

俺が両手を広げると、三匹はこちらに向かってくる。

ドラゴンのめろんは相撲のぶつかり稽古のように。

「ギャウウッ！」

フェニルのわたあめは高速移動をしながら。

「クオオンッ！」

フェニックスのいちごは激しい炎を噴いて。

「ゴオオオッ！」

それぞれの特徴を生かした攻撃だ。力・速さ・炎、とそれぞれが突出した能力を惜しげもなく発揮して向かってくる。

でも、まだまだ甘いな。

「でりゃあああっ！」

「ギャウッ！」

「クオンッ！」

「ゴオオッ！」

俺はめろんを投げ飛ばし、わたあめよりも速く動き、いちごの炎にぬくもりを感じる。

「うーん、やっぱり食後の運動は気持ちいいね！」

《でもやっぱりホシ君が化け物すぎるwww》

《ペットもダンジョンでは敵なしなのに笑》

《最強種よりも最強の人間》

《魔核を三つ持つてるのは強すぎるってww》

「はは、魔核があると力が湧いてきますからね」

魔核というのは、ダンジョン内のみ存在する魔素という物質で生成された心臓のようなものだ。この魔素があることで、ダンジョン内にいる探索者は超常的な力を使えるが、魔核を持つ者はこ

れを体内で生成できる。

そのため、魔素を外から吸収するよりも効率がよく、より強い力を生み出せる。簡単に言えば、魔核を持っているとより強くなれるということだ。

さらに、本来ダンジョンの中でしか発揮できない力を外でも発揮できるようにする。そこまではいい、そこまではいいんだけど……

「でも、なんで魔核持ちの人間は俺だけなんだ……」

現状、魔核持ちの魔物は複数確認されているけど、魔核を持つ人間は俺だけらしい。そもそも魔核自体が最近見つかったっていうのもあるけど、おそらく我が家の環境が起因しているのだろう。

そう思いながら、俺はふと辺りに目を向ける。

「まあ、あれで育ったからなんでしょうけど」

目を向けたのは、近くを流れる魔素水まそすいの川。

魔素水とは、魔素を濃密に含んだ水のこと、飲むだけでパワーアップできる超希少な素材らしい。

でも、それがうちの自宅ダンジョンには川のように流れている。

魔素水を幼い頃から飲んでたら、いつの間にかこんな体になっていた。

《改めて規格外なダンジョンで草》

《自宅ダンジョンってだけでも珍しいのに》

《うらやましい》

《いやいや家に魔物いたら普通は怖いだろうw》

《ホシ君だから適応できてるだけだわ笑》

「そ、そうですか？」

最強種のペットや環境、色んな要素を含めて、ここは規格外ダンジョンと言われている。

生まれ育った家をそう言われるのは複雑だけど、そのおかげでできたこともたくさんある。

「まあ、この前はこの力のおかげで助かりましたけどね」

その一つが、『魔物災害』まものさいがいから俺が住む街を救えたことだ。

《魔物災害の件な》

《あれはかつこ良かった！》

《あの配信のアーカイブずっと見返してるわ》

《日本中がホシ君に気づいた日》

《ホシ君伝説の中でもトップクラスだな》

魔物災害とは、一か月前に起きた災害のこと。

魔核を持った魔物がダンジョンを飛び出し、街へ侵攻してきたんだ。

魔物は魔素を吸って生きていたので、本来は魔素のない地上に出ることはできない。だからこそ人間の生活はこれまで脅かされなかった。

しかし、魔核を持っている魔物は別だ。

彼らは魔素を体内で生成するため、地上へ出ることができる。逆に、魔素がないことで、人間はダンジョン内のような超常的な力を発揮できない。

つまり、人間側の対抗手段が何もないんだ。

そんな危機的状况で、俺は唯一の魔核持ち人間としてボスを倒した。

その結果が今のコメント欄だ。

《よっ、街のヒーロー!》

《日本の救世主!》

《いや世界の救世主だろ!》

《彦根家がいなかったら侵攻止まらなかったしなあ》

《英雄ホシ君》

《ひゅー、かつこい!》

「ちよつといじつてますよね!」

あれ以来、視聴者には過度に持ち上げられている。今までこんなことなかったから、なんだかム

ズムズする。

でも、百歩譲ってこれはまだ嬉しい。

……問題はこんなコメントだ。

《今日は外で魔核の力は使った?》

「つ、使ってないですよー!」

俺が魔核持ち人間だと知れ渡ったため、日々そんなことを言われていた。

《えー本当に?》

《すごい力なのにもつたいねえ》

《俺なら好き勝手するけどなあ》

たしかに気持ちはわかるけど、したくてもできないんだ。

「あれ以来、なぜか地上では魔核の力を解放できないんですよ」

あの時は、街に被害があったことに怒っていたからか、自然に力が湧いてきた。

でも、今はそんなことはなく、地上では魔核の力を使えない。だから期待されても困ってしまう。ダンジョン内では変わらず力を発揮できるんだけどね。

そんな言い方が気になったのか、質問が飛んでくる。

《でも、魔核の力は使いたいんだ?》

「できるなら使いたいです!」

俺が即答すると、コメントには「意外」などの反応が見られる。

だけど、俺だって力を使いたいに決まっている。

なんたって――

「だって体育で目立ってるんですよ!」

《体育かーい!w》

《発想が小学生で草》

《魔核の力でホームランってか?笑》

《たしかに無双できるだろうけどwww》

《唯一の魔核持ちがホシ君で本当に良かった》

《今日も日本は平和です》

「えーそうですかね?」

俺の渾身の欲望は誰にも刺さらなかった。体育でかっこいい姿を見せられるなんて、みんな憧れると思うんだけどなあ。

「でも、結局は地上で使えないから意味ないですよね……」

《割とシヨック受けてて草》

《小さい夢のくせにwww》

《ホシ君は変わらなくて好感持てるわw》

すると、小さくなったベットたちが笑顔でこちらに寄ってきた。

「ははっ、撫でてほしいって?　しょうがないなあ」

「きゅいゅっ!」

「わっふう!」

「ぼおっ!」

俺が三匹を撫でると、それぞれ嬉しそうな表情を浮かべる。

ちなみに、ベットたちも魔核を一つずつ持っているけど、日本を滅ぼそうとかそんな野望は全くなさそう。魔核を持っているのが俺たちで良かったと言われるのは、こういう部分なのかな。

なんて考えていると、奥に人影が見えた。

その目立つ黄緑色の髪に、俺は顔をしかめる。

「ホシ君、配信してるなら言つてよー！」  
「げっ」

現れたのは、エリカ姉さんだ。

姉さんは地面から生やしたツタに押されるように加速しながら、全力でこちらに向かってくる。避けるのも面倒だった俺は、すぐに柔らかい感触に包まれた。

「もー、いつもお姉さんも出たいって言ってるじゃない！」

「こんなことをするから嫌なんだよ」

「お姉さんとホシ君は仲良しだもんっ！」

べったりしてくる姉さんの登場に、コメント欄は歓喜した。

《エリカさんきたあああ！》

《今日もお美しい！》

《エリママ〜!!》

《今日もホシ君大好きだなあ笑》

《ホシ君も嬉しそうだね》

エルフであるエリカ姉さんは、彦根家をまとめる存在だ。両親のいないこの家では、すごくお世話になっている。口には出さないけどね。

さらに、姉さんの後方からは煌びやかな水色の髪が見えた。

「まったく、何やってんだか」

「お、ブルーハワイ」

最強種の一つであるセイレーンのブルーハワイだ。

一見幼い少女だけど、ペットたちと同じくSランク魔物だ。今はぺたぺたと歩いている人型の下半身も、その気になれば人魚のように変えられる。

「相変わらず騒がしいわね、あんたたちは」

ブルーハワイは呆れた風を装っているが、俺はすかさずツッコんだ。

「今さりげなく前に出たよね？ めっちゃカメラ目線だし」

「へっ!？」

そう、ブルーハワイは実はお子ちゃまで、一番の目立ちたがり屋だ。

《しらばつくれるブルーハワイちゃんW》

《髪型もばっちりじゃん笑》

《今日もかわいいぞ〜!》

《やっぱり目立ちたいのかWWW》

《SNSの更新頻度も高いしなW》

俺やコメント欄の指摘に、ブルーハワイは開き直った。

「わ、悪い!? だってあたしは、彦根家のアイドルだもの!」

「やっぱ配信に映りに来たんじゃないん……」

このアイドル（自称）のブルーハワイに、エリカ姉さんも画角に入り込んだことで、配信はより映えて見える。

もちろんこの二人も魔核を持っており、魔物災害では大活躍した。

《彦根家が大集合!》

《やっぱ綺麗だなあ》

《みんな人間離れしてるし》

《こいつら全員最強種なんだよなあw》

《ホシ君も最強種認定されてて草》

これが彦根家——俺の家族だ。

みんななどの日常配信やダンジョン配信、『魔物災害』などを経て、俺の配信は今の人気を得ることができた。みんなで作り上げてきたチャンネルというわけだ。

「みんなありがとね」

「「……?」」

伝わっていないだろうけど、俺は改めてみんなに感謝した。

そんな時、話題を変えるように姉さんが尋ねてくる。

「そういえば、ホシ君はこの後行くのよね? 例の場所」

「あ、うん」

俺がうなずくと、姉さんの表情は若干曇る。

「くれぐれも気を付けてね。何かあったらすぐに言うのよ。どこにいようとすぐにホシ君のもとに駆けつけ——」

「はいはい、わかってるって」

長くなりそうなので遮って返事をする。一方で、コメント欄は困惑気味だ。

《なんの話だ?》

《例の場所?》

《どっか行くの?》

「はい、今日はですね」

魔物災害から約一か月。

今はせっかくの夏休みだから、新たな配信もしていきたい。

そんな気持ちで、俺はある場所へ行くことにした。

その場所とは——  
「地下三階に突撃い！」

☆ ★ ☆

同時刻、ホシと同じ街のギルド。

「せいの責野局長、大変です！」

ギルドの男性職員が会議室の扉を開き、中にいた人物に声をかけた。

ギルドとは、ダンジョンや探索者を管轄する公的な専門機関である。ダンジョンの難易度の設定や探索者のランクの認定、ダンジョン周辺の安全管理などその業務は多岐にわたる。

ギルド職員はそのまま報告を続ける。

「対象、彦根ホシが地下三階へ行くとのことです！……あ」

「ええ、今ちょうど配信を見ているところよ」

しかし、中にいた者はすでにホシの配信を確認していた。

彼女の名は、責野任子。

ホシと同じ街のギルド支部局に務めており、そのせいで本部から色々と無理難題を押し付けられている、不慣れた中間管理職だ。

三度の飯より胃薬を飲む責野だが、今は局長ではない。

「それから、私は『彦根ホシ管理部長』よ。だから、ただの責野でいいわ」

「あ、はい、そうでしたね」

魔物災害が発生した当時、局長という立場だった責野は、独断で彦根家に全てを託した。それが功を奏し、被害は最小限に抑えられたのだ。

そして幸か不幸か、正式にホシを監視するという役目を本部から与えられ、このギルドへ戻ってきた。

しかし、責野は思わぬパンチを食らう。

「でも、良かったですね。責野さんは彦根家のペットが大好きだから」

「……え？」

「ははは、とぼけなくても職員はみんな知ってますよ。責野さんがペットにメロメロなことぐらい——むぐっ!？」

すると、男性職員の口を押さえようと、ギャル職員が飛び出してきた。

「なんでもないですよー責野さん。では、私たちは仕事に戻りますね！」

「え、ちよっ」

職員の二人は共に部屋を出て、そのままパタンと扉を閉められた。

一人になった部屋の中で、責野は顔を赤くしながらつぶやく。

「べ、別にそうじゃないもん」

初めは、彦根家という強大な存在を相手に、ビビりまくっていた責野。

だが、彦根家のペットと関わる内にその可愛さに気づき、今では大ファンである。しかし、ギルドの役職持ちという立場上、一人の探索者に深く肩入れするわけにはいかないと思  
い、それを必死に隠していた。

そのはずが、部下たちには本当の気持ち告知れ渡っていたようだ。

「……まあ、また胃の痛む日々が始まるかもしれないけど……」

それでも、責野の苦悩は絶えない。

今まで彦根家と関わってきた経験が、彼女へ訴えかけていたのだ。

「地下三階……また波乱の予感がするわ」

彦根家の地下三階は、やばい、と――

## 第一章 妖狐の親分さん

「地下三階に突撃い！」

俺がそう宣言をすると、コメント欄は沸き上がった。

《地下三階だつてー!?!》

《ついに出了ああああ!》

《ようやくお披露目か!》

《あの魔境まきょうって言ってた!?!》

《今まで以上のところってどんな場所だよ……》

「皆さんよく覚えてますね」

地下三階については、以前の配信で軽く話題に出したことがある。

それを覚えてくれている人もいるみたいだけど、俺は改めて自宅ダンジョンの構造を思い浮かべた。

「一、二階は今まで見てもらった通りで、俺もよく行き来します」  
うちの地下一階は『遊び場』、地下二階は『生活スペース』。

ここ二つは、ほとんど毎日足を運ぶ場所だ。

「でも、三階に行くことはほとんどありません」

そして、地下三階が『魔境』。

いきなり物騒だけど、おじいちゃんが言っていたので俺もそう呼んでいる。

おそろく理由としては――

「あそこは広すぎるんですね」

地下三階は、一、二階とは比べ物にならないほど規模が大きい。

もはや、一つの独立したダンジョンといった方が正しいかもしれない。

さらに、驚くことはまだある。

「なんか色んな種族も住んでますし……」

地下三階という環境には、多くの独自の種族が暮らしているんだ。

一番奥まで行ったことがないからわからないけど、把握しているだけでも複数の種族がいる。

「まあ、そんなこんなで地下三階は『魔境』って言われてます」

《今までもめっちゃ広かったのに》

《相変わらずぶっとんだ家だなあ》

《なんで自分ちに未開の地があんだよww》

《彦根家基準の魔境って一体……》

「現状、特に困るようなことはないですけど」

それでも今まで平和だったのは、地下三階の住人との間にはルールが決められているからだ。

それは、「自由に過剰していいから厄介事は起こさない」こと。

この約束もあって、住人は勝手に出てこない。

「おじいちゃんが色々と手を回してくれてたみたいですね」

《おじいちゃんまじで偉大》

《また逸話に追加されるな》

《毎度どんなおじいちゃんやねんw》

《ホシ君の面倒を見てた時点で偉大なんだよなあ》

「まあ、とにかく行ってみましょうか」

そうこうしている内に階段を下り終え、地下三階の入口に着いた。

一息ついた俺は、扉に手をかける。

「ここが地下三階です！」

その扉を開けた途端、ぶわっと景色が広がった。  
カメラが捉えた幻想的な光景に、コメントは一気に加速する。

《うわあああああ!?!》

《すっげええええ!!》

《なにこれえっぐ》

《絵本の中みたい……》

視聴者はすでに引き込まれているみたいだ。

でも、より雰囲気を出せるよう、俺もカメラの後方から言葉をつけ加える。  
「最初に視界に入ってくるのは、真っ直ぐ続く道を彩る豊かな新緑」

《ん?》

《どした?》

「空からは木漏れ日が差し込み、高く伸びる木々をより際立たせる」

《ホシ君?》

《これ誰?》

「夏を思わせる風景ではあるものの、セミの鳴き声や暑さはまるでない。耳を気持ち良く通り過ぎていくのは、近くを流れる川と揺れる木々の涼しい音のみ」

《詩人になっちゃった?》

「まるで都会の喧騒を離れ、山奥に来た時のような高揚感。この光景は、それを覚えさせてくれる素晴らしい情景だ」

《なんかエモくなってきた》

「って感じで読むのよ、ホシく——あ、やべっ」

と、余計な文章まで読んでしまったところで、浮遊型カメラがこちらを向く。  
さっと隠した紙が映ったことで、コメント欄は納得の様子を見せた。

《思いつきりカンペ持ってるじゃねえかww》

《エリカさんが書いたのかな?》

《隠れて読んでるの小賢しくて草》  
《もうちよっとで詩人になれたのになあw》

「くうっ！」

最後にポロが出たことで、格好をつけられなくなってしまった。  
実はこういうこともできちゃうんです、って姿を見せたかったのに。  
姉さん余計なこと書かなくていいよ！

「で、でも、雰囲気は伝わりましたよね！」

《たしかにねw》

《ちよっとそれっぽかった笑》

《ラジオ代わりに聞いているので助かります》

「ほっ」

温かいコメントに安心して、俺は改めて風景を見渡す。

扉を開けて、すぐに続いているのは林道だ。どうやってできたのかは謎だけど、奥に伸びていて道を示してくれている。

あとは、ちょうど良い陽射しと川があつてめっちゃ気持ち良い。

「それにしても不思議ですよね」

すぐ後ろに扉があるのに、地下三階へ入った途端に天井は見えなくなる。

どこまでも続く空から、陽の光が注いでいるんだ。

ダンジョンって本当に謎だらけだ。

「じゃ進みますか！」

地下三階の雰囲気も感じたところで、俺は目的地を目指して歩き始めた。



くねくね曲がる林道を歩いて、しばらく。

「今度は虫取り網でも持ってこようかなあ」

《ホシ君似合うわw》

《ウッキウキでかわいい》

《いよいよ小学生みたい》

「べ、別にウッキウキしてるわけじゃないですからっ！」

《ハレバレで草》

《ツンデレみたいでかわいいw》

《ホシ君はヒロイン》

とっさに気持ちを隠そうとするも、簡単に察せられたらしい。  
そんな雑談も交えながら、結構進んできたと思う。

《まじで幻想的》

《綺麗だなあ》

《魔素水の川は当たり前前に流れています》

ここまで来ても、周囲の風景に関するコメントは絶えない。

むしろ次々と出てくる新しい景色に夢中になってるみたいだ。

「それなら今度、探索配信も良いかもしれないですね」

せつかくの夏休みだし、そういうのもアリかな。

でも、大きなことをやるとなると、あの人に許可を取らないといけないのかな。今回は目的があるけど、それもちょっと面倒かも。

「お、ここを行つた先です！」

そんな時、目印の分かれ道が見えて、俺は少々かけ足になる。  
すぐに出てきた新たな景色に、視聴者も釘付けになった。

《なんだここ!?》

《急になんか出てきた!》

《まじで秘境じゃん!!》

林道の先に大きな鳥居とびいが現れた。赤く大きな鳥居は道を示すようにいくつも重なり、奥には大きな神社も見える。

京都にも似たものがあったような、なかったような。

「あれが今回の目的地——『妖狐神社』です」

《妖狐神社!?!》

《キツネには神社のイメージがあるけど!》

《世界観すげえな》

《急にこんな出でくんのかよ地下三階》

《これは間違いなく魔境だ……》

そうして連なる鳥居をくぐり、神社に辿り着く。

赤を基調とした幻想的な建物だ。笛の音なんかが聞こえてきそう。そこで俺は、前と同じように声をかける。

「ごめんくださいー」

俺の声に反応して、奥からのそのそと音が聞こえてきた。明らかに大きな獣の足音だ。

やがて姿を見せたのは——九・つ・の・尻・尾・を持った狐さん。

狐さんは、女性の低めの声を発した。

「よく来たわね」

もふもふな体は綺麗な狐色で、尻尾はどれも抱き心地がよさそう。だけど、その眼光は見た者を怯えさせるほどに鋭い。

そんな魔物の登場に、コメント欄には一斉にその名前が書かれた。

《九尾!?》

《九尾の狐じゃないか!?!》

《伝説の魔物やんwwww》

《すげえ迫力!!》

《かけええええ!》

《雰囲気ある〜!》

「こんにちは。イナリさん」

「その呑気なあいさつ、相変わらずじゃのう」

この魔物は九尾の『イナリ』さん。

以前、街の復興を手伝ってもらった妖狐たちの親分だ。

《名前はイナリさんか!》

《そのまんまと言えはそうだけどw》

《よくそんな可愛い名前付けたな笑》

《怒られないのか……?》

「この名前を付けたのはおじいちゃんですよ」

「そうじゃな」

《命名はおじいちゃんかあw》

《それなら仕方ない……のか?》

《イナリさんも悪い気はしてなさそうだな》

視聴者も納得を示したところで、イナリさんが口を開く。

「して、今日はわらわになんの用じゃ」

「遅くなってごめんなさい。実は、例の物を持ってきたんです」

「……ほう」

イナリさんはじつと俺を見つめる。

街の復興で妖狐の手を借りる時、親分のイナリさんとは約束を交わした。力を貸してもらおう代わりに、今度「お供えをする」というものだ。

今回、地下三階に来た目的はこれを届けること。

でも、イナリさんは低い声で忠告してくる。

「言っておくが、わらわはお供え物には厳しいぞ」

「そう言われるとプレッシャーです」

《ヒエツ》

《怖いよ……》

《これは失敗できねえぞ》

視聴者に緊張が走る中、俺は固唾<sup>かたす</sup>を呑んでイナリさんと目を合わせる。

「でも、俺なりに頑張つて選んでみました」

「よかろう。では受け取るでしょう」

「はい！ 俺が持ってきたのは……これです！」

俺は腕にかけたエコバッグから、お供え物を取り出す。

「油揚げ！」

俺はスーパーで買ってきたそれを手一杯に広げた。買ったてはやはや、値引きのシールまで付いている。

すると、イナリさんは一度閉じた目をゆっくりと開けた。

「……さま」

「え？」

「貴様あ！」

開いた目はギロリと鋭くこちらを睨<sup>にら</sup>み、すごい威圧感だ。

後ろの九つの尻尾もこちらを向き、いつでも攻撃できる体勢に見える。

《ちよっホシ君!?!》

《それはなめすぎだつて!》

《ダジャレしてる場合じゃないぞー!》

《やばいやばいやばいやばろ》

《怒らせちゃってるよ!!》  
《今すぐ謝ろう!》

視聴者が騒ぎ立てる中で、イナリさんは問答してくる。

「貴様、どうしてこれを選んだ」

「なんか好きって聞いたことあるなって」

「……ほう」

俺の答えに、イナリさんの目がカッと光る。

「よくもやってくれたのう!」

「……!」

それと同時に、九つの尻尾が一斉に伸びた——油揚げに向かって。

「それはわらわの大好物じゃ!」

そして、急に子どものような声を上げる。

「ホシよ、なかなかやるのう!」

「んもーなんだよ」

イナリさんは、わーいと油揚げを胴上げしながら、一本の尻尾で俺の肩をバシバシ叩く。どうやら喜んでくれたらしい。

ただし、コメント欄には動揺が広がっている。

《ぶ、無事だったのか……?》

《尻尾が伸びた瞬間まじでビビった……》

《画面の前で思わず力入っちゃった》

《なんだ優しい人なのかあw》

《イナリさんかわいくて草》

《これが本来の姿なのか?》

そうか、視聴者にとってイナリさんは初見だから、実は子どもっぽいつてことを知らなかったのか。

たしかにあの見た目なら、びつくりするのも仕方ないのかも。

「あ、じゃあこれもあげますね」

「なんじゃ?」

ならばと、俺はエコバッグからさらにある物を取り出す。

「いなり寿司です」

「なんじゃと!」

「これはやりすぎかなと思っただんですが——」

「それも大好きじゃ!」

イナリさんだから、いなり寿司。  
こっちはさすがに失礼かなと迷ったけど、イナリさんは無邪気な声でそれをすくい上げた。  
お供え物の油揚げと合わせて、とても嬉しそうに掲げている。

《はあく良かったあ》

《怒ったら怖そうだったからな》

《やはりホシ君が一枚上手なのか?》

《相変わらず物怖じしねえなw》

「イナリさんは優しいですよ」

いつものようにコメント欄と会話をしていると、イナリさんが興味を持ったみたいだ。

「そういえばホシよ、さつきからそれはなんなのじゃ?」

「前に話した配信です」

「ほう! これが例の!」

それを聞いた途端、イナリさんは目をキラキラと輝かせてカメラに近づく。

この距離は多分、相当どアップになっている。

「おーい! 人間どもよ、見えておるかー!」

《うおっ!?》

《ちっかwww》

《至近距離で九尾を見れちゃった!》

《顔までもふもふだあ》

《触ったら気持ち良さそう……》

「イナリさん。近いそうです」

「む、そうじゃったか!」

イナリさんはさつとカメラから距離を取ると、思い出したかのように後ろへ振り返った。

「そうじゃ! お主らも出てくるがよい!」

イナリさんはそのまま妖狐神社の方へ声をかける。

それに反応して、神社の奥からはぞろぞろと妖狐たちが出てきた。

「!こーん!」

「おー! みんな久しぶり!」

俺にとつては、実に数週間ぶりの再会だ。

小さなもふもふの集団に、コメント欄にも歓喜が見える。

《きゃー!》

《めっちゃ狐ちゃん出てきた!》

《かわいいいいいいいい!!》

《こっちは小っちゃいのね笑》

《配信で言ってた子たちだ!》

《SNSでも見たぞ!》

「そうです、この子たちが妖狐です」

視聴者さんに少し話したけど、見せるのがこれが初めてだ。

街を復興してくれている様子は、SNSで出回っていたみたいだけどね。

久しぶりの妖狐の姿に、俺も思わず駆け寄る。

「みんな元気にしてたか〜」

「「こーん」」

狐色の体をしたもふもふたちは、こちらを見上げて可愛い鳴き声を上げる。

癒<sup>い</sup>しの塊<sup>かたまり</sup>みたいな存在に、俺の手は考える前になでなでしていた。

「あはは、可愛いなあ」

「「こん!」」

《ホシ君ずるいぞ!》

《俺にもモフらせてくれ!》

《かわいいなあ》

《魔境の中にも癒しがあつて良かったあ》

うらやましい気持ちは俺も痛いほどわかる。

それほど俺も妖狐たちを気に入っていた。

「むう……」

だけど、そんな俺たちをイナリさんはジト目で見つめている。

「どうしました?」

「お主、わらわにはそんなことせぬくせに」

「え?」

そう言うと、イナリさんはぶくつと頬を膨<sup>ふ</sup>らます。

なんか怒ってる?

《イナリさん嫉妬中》

《なでてほしいってさw》

《ホシ君は罪深いなあ》

コメントを見て気づいた俺は、イナリさんへ手を伸ばす。

「え、じゃあイナリさんも撫でて——」

「もういいわい！」

でも、イナリさんはふいつと顔を逸らしてしまった。

「ごめんなさい。何か無礼があつたなら……」

「そうじゃないもんっ！」

イナリさんは尻尾同士を絡ませて、つーんとしている。

どうすれば良かったんだろう……なんて考えている内に、やがてイナリさんの方から口を開いた。

「まあ、お願いを一つ聞いてくれれば、許してやらぬこともないぞ？」

「お願い？」

「うむ」

イナリさんはうなずくと、九つの尻尾をびんと広げて宣言した。

「わらわは地上に行きたいぞ！」

「うーん……」

でも、俺はすぐにはいとは言えない。

「なんじゃその返事は——！」

声を荒らげるイナリさんに、俺は考えていることを洩々説明する。

「あの、地下三階にはルールがあると思うんですけど」

「知らん知らん！ そんなの知らん！」

「駄々をこねても無理ですよ」

「むう。人間はこういうのに弱いと聞いたんじゃがな」

「誰情報？」

多分、おじいちゃん情報だろうなあ。

そう思いつつ、俺はイナリさんが地上へ出た場合の一番の問題点を指摘する。

「そもそも、その目立つ見た目はどうするんですか」

「……！ ふっふっふ、その問いを待っておったのじゃ」

だけど、イナリさんはなぜか得意げな顔になった。

「ならば、こうするまでじゃ！」

「うわっ！」

イナリさんが手を掲げると、突如ボンツと辺りに煙が立つ。

やがてその煙が晴れ始めると、声が聞こえた。

「これでどうじゃ！」

そうして出てきたのは——大・人・の・女・性・だ。

「わらわはこんなこともできるんじゃぞ！」

浮世離れた美しい顔に、両肩が出ている妖艶な和服。九尾の形態から獣耳だけは健在で、黒い髪は後ろでお団子を作っている。

まるで『花魁』をイメージさせる人型の姿だ。  
突然の変身には、コメント欄も大盛り上がりを見せる。

《イナリさんが絶世の美女に!?!》

《和服も似合いすぎだろ!》

《とんでもねえ美しさだ……》

《刺激強めですねえ》

《これは素直にえっちはです》

《和服美女!!》

残った煙を手で払いながら、俺もイナリさんの姿に反応する。

「そんなことできたんですね」

「妖狐は別名『化け狐』ともいう。このぐらいできて当然よ。子分たちにここまでの力はない  
がの」

「へー」

「む」

でも、俺の返事をそっけなく感じたのか、イナリさんはムツと目を細めた。  
すると、イナリさんは続けて手を掲げる。

「そうかそうか。ならばこれも見せよう!」

「ん?」

次の瞬間、イナリさんの背後からふんわりとしたものが出現する。

それは長いマフラーのように、イナリさんの首から提げられた。

「もふもふの羽衣じゃ!」

まるでかぐや姫に出てくる『天の羽衣』みたいだ。

《すごい見た目だな》

《天女みたい!》

《ますます現実離れた》

《ふつくしい……》

《とんでもねえ美人さんだな》

イナリさんはコメント欄をチラ見しながらドヤ顔を浮かべる。

その上で、再びこちらに視線を向けた。

「どうじゃ、美しいじゃろう?」

「ふーん」

「ふーん……じゃと?」



美しいとは思うけど、そこまで好みというわけではなかった。俺の感性が子どもすぎるのかな。首を傾げる俺の隣を妖狐がトコトコと走っていく。

「あ、待って〜！」

俺は反射的に妖狐を追いかけて、そのまま胸元に抱きかかえる。

「あく君たちは可愛いなあ」

「……」

そんな俺の様子を、イナリさんは真顔で眺めていた。

《君たち「は」ねw》

《子どものホシ君には刺さらず！》

《ホシ君に花魁は早かったか笑》

《大人の男なら歓喜なだけだな》

《興味なさそうで草》

しばらく妖狐のもふもふを堪能して、俺はイナリさんに視線を戻した。

「じゃあ、イナリさんを地上に行かせるかどうかですけど」

「……！ どうじゃ、どうなのじゃー！」

落ち込んでいたイナリさんだけど、途端にウキウキした表情を見せる。

でも、残念ながら期待には応えられない。

「一旦保留で」

「なんじゃとー！」

「うわっ！」

イナリさんはこちらに駆け寄り、俺の両肩を激しく揺らしてきた。

「どうしてじゃ！ こんな美女が隣におれば、お主も鼻が高いであろう！」

「いや、逆にちよつと目立ちすぎと言うか……」

「そ、それは……仕方ないじゃろっ！」

「まあまあ一応考えておきますので、今日は一旦勘弁してください」

「がーん！」

イナリさんは効果音を口で発し、激しくショックを受けていた。

《これはホシ君が正しいなW》

《こんな人がいたら目立ってしょうがないWW》

《さすがに連れていけねえだろ笑》

でも、イナリさんはどうしても諦められないらしい。

「行きたい行きたい行きたい！」

「また子どもみたいな駄々を……」

イナリさんは涙ぐんでいて、せっかくの美人さんが台無しだ。

まあ、こつちが俺の知ってる本来のイナリさんだけだね。

「おじいちゃんでも同じことを言ったと思いますよ」

「ぐぬぬ……」

こんなイナリさんでも、おじいちゃんの名を出されたら引つ込まざるを得ないらしい。

すると、イナリさんはハッと何かを閃ひらめいたように目を見開いた。

「で、では、この地下三階で親睦会しんぼくかいを開くのはどうじゃー！」

「親睦会？」

「うむ！ わらわとお主が会うのも久しぶりじゃろう！ ここは一つ、さらに仲を深めるといいう意味も込めて！」

たしかに、地下三階から出ないのなら拒否する理由はない。

俺も思考を巡らせていると、よっぽど遊びたいらしいイナリさんは次々に押ししてくる。

「そうじゃ、ペットやブルーハワイなんか一緒にどうじゃー！」

「あー」

「面白いことをしたら配信のネタにもならぬか!?」

「おー」

そう言われると魅力的に思えてくるな。

立ち読みサンプル  
はここまで

《イナリさんとの親睦会見たい！》  
《もっとイナリさんを見せてくれ！》  
《親睦会って自分から言つものなのか？w》  
《ペットたちとの企画つても良いな》  
《ブルーハワイはノリノリで来そうw》

視聴者の反応も良さそうなので、俺はイナリさんにうなずいた。

「わかりました。じゃあ親睦会をやりましょう」

「本当か！ やったあ！」

イナリさんはわーいと両手を上げる。

ペットたちともしばらく顔を合わせていないし、イナリさんも暇だったのかな。

「というわけでホシ、何をやるかはお主に任せたぞ！」

「え、そっちから提案したのに？」

「お主の方が配信というものを理解しているであろう！」

「そんな都合のいい……」

俺はぶーたれるけど、それも一理ある。

「まあわかりました。準備ができたなら伝えに来ますね」

「うむ！ 楽しみにしておるぞ！」

こうして、妖狐の親分、イナリさんとの配信は終了。

次の企画は親睦会に決まった。

☆ ★ ☆

配信を終えて、ギルド内。

「ふうー……」

息を吐きながら、責野はだらりと椅子にもたれかかる。

天井を見つめるその視線は、どこか虚ろだ。

「九尾？ ……九尾って何？」

息をするように胃薬を飲みながら、責野はギルドの魔物データを検索する。

九尾を知らないわけではないが、魔物としては聞いたことがなかったからだ。

そして、やはり嫌な予感も当たる。

「……検索結果なし」

予想通り、九尾のデータは出てこない。

これはつまり、イナリは「未確認魔物」ということになる。

「だからって、弱いはずないわよね……」